

## 彙報

### 平成一四年度秋期東洋学講座講演要旨

(東洋学の至宝・モリソン文庫)

第四七〇回 一〇月一五日(火)

### モリソンの仕事とモリソン文庫

京都大学東南アジアセンター教授  
東京大学東洋文化研究所教授(併)

濱下武志

#### I モリソンとその仕事

George Morrison (父親) スコットランド出身 オース

トラリア、ピクトリア州ギーロンング学院校長

George Ernest Morrison (一八六二・二・四—一九二〇・

五・二〇) と三人の息子達

Ian Ernest Mcleavy Morrison タイムズ通信員、朝鮮

戦争で死亡(一九五〇)

Alistair Morrison サラワク政府に勤務 Hedda Morrison

写真家

Colin Morrison

#### II G・E・モリソン(一八六二—一九二〇)の仕事

(附モリソンならびにモリソン文庫関係年表)

1. タイムズ特派員(1) —— イギリス帝国のアジア戦略
2. タイムズ特派員(2) —— タイをめぐるイギリスと東  
南アジア
3. タイムズ特派員(3) —— 八ヶ国連合軍の義和団事変  
と中国
4. タイムズ特派員(4) —— 英露角逐と日露戦争
5. 中華民国政治顧問 —— 借款交渉の仲介
6. オーストラリアのアボリジニ政策
7. 医師としての活動

一八八二 二一歳、オーストラリア二〇四三マイルを

一二三日で徒歩で縦断

一八八七・八 エディンバラ大学で医学を修了

一八九〇—一八九三 メルボルン郊外の Ballarat 病

院で医師として勤務

一八九三・五 病院を辞し、極東へ旅行

一八九五・一 一 タイムズのアジア特派員に

一八九五・一 一 からおよそ二年間、タイを中心に活動

一八九七・二 タイムズ北京駐在特派員

- 一九〇〇・六一八月 義和団事変で北京城籠城 イギリス軍の士官代理として活躍
- 一九二二・八一二月 タイムズ特派員を辞し、袁世凱の政治顧問に就任（この頃モリソン文庫売却を決意する）

- 一九一七・六・九 黎元洪の顧問に就任
- 一九一七・八・二九 岩崎久弥氏（一八六五—一九五五）モリソン文庫購入

- 一九一九末 パリ講和会議中国代表団の顧問としてヨーロッパへ

- 一九二〇・五・二〇 イギリスにて死亡
- 一九二四 東洋文庫財団法人となり、現在地に置かれる

- 一九六七 東洋文庫五〇周年展
- 一九七七 モリソン文庫渡来六〇周年東洋文庫展示会

### III モリソン文庫の構成

#### 1. 蔵書票について

#### 2. モリソン文庫の内容

- 書籍類（歴史・紀行記・キリスト教関係・外交）
- 定期刊行物（海関資料・領事報告・商業報告）
- パンフレット・論文類（モリソンパンフレット）

その他（モリソンコレクション…メニユー・名刺・銅版画）

#### IV モリソン文庫の役割と今後の研究課題

- 1. モリソン精神
- 2. 同時代資料と歴史研究（歴史と現在、歴史と実践）
- 3. 異なる資料群の相互関係とそれらの比較検討
- 4. 文物資料と社会史
- 5. モリソンと東南アジア
- 6. モリソン文庫と関連資料（アーカイブス）
- 7. 情報・メディア・外交交渉
- 8. 画像情報
- 9. 中国近代史研究（外国人アドバイザーと「洋人の朝廷」）

#### 〈関連文献〉

- 1. G.E.Morrison, *An Australian in China: Being the Narrative of a Quiet Journey across China to Burma*, Horace Cox, London, 1895
- 2. *Catalogue of the Asiatic Library of Dr. G.E. Morrison*, Part1, 2, The Oriental Library, Tokyo, 1924

3. Cyril Pearl, *Morrison of Peking*, Angus and Robertson, 1967
4. Karl A. Wittfogel, *Agriculture: A Key to the Understanding of Society, Past and Present* (The thirty-first George Ernest Morrison lecture in ethnology 1970, Australian National University Press, 1970)
5. *A Classified Catalogue of Pamphlets in Foreign Languages in the Toyo Bunko Acquired during the Years 1917-1971*, Toyo Bunko, Tokyo, 1972
6. Lo Hui-Min ed., *The Correspondence of G.E. Morrison I, 1895-1912*, Cambridge University Press, 1976
7. Lo Hui-Min ed., *The Correspondence of G.E. Morrison II, 1912-1920*, Cambridge University Press, 1978
8. Ian Morrison, *Malayan Postscript*, S. Abdul Majied & Co., 1993
9. Alastair Morrison, *Fair Land Sarawak: Some Recollections of an Expatriate Official*, Southeast Asia Program, Cornell University, 1993
10. Setsuo Ikehata ed., *Catalogue of the Southeast*

*Asian Library of Morrison II in the Toyo Bunko*,  
The Toyo Bunko, Tokyo, 2000

11. ウヰン・ノウス瑛子『日露戦争を演出した男モリソン (上) (下)』東洋経済新報社、一九八八年。
12. H. Warrington Smyth, *Five Years in Siam: From 1891-1896*, 1898
13. Kazuo Enoki, *Dr. G. E. Morrison and the Toyo Bunko*, The Toyo Bunko, 1967

第四七一回 一〇月二二日(火)

### 近代中国のアヘン問題とモリソン文庫

就実女子大学文学部教授 新村 容子

今日の講座では、私自身が近代中国のアヘン問題について研究を進めていく過程において測り知れない恩恵を受けたモリソン文庫所蔵史料についてお話ししたいと思う。ご紹介したい史料は主に雑誌『フレンド・オブ・チャイナ (The friend of China)』とモリソン・パンフレットである。

『フレンド・オブ・チャイナ』とは、一八七四年にロン

ドンにおいて結成された「アヘン貿易反対協会 (Society for the suppression of the Opium Trade)」の機関誌であり、一八七五年に創刊号が出され、毎月、あるいは隔月に刊行され、一九一三年四月まで続いた。記事の内容は、中国に関するものでは、領事報告からの抜粋、中国在住の宣教師や医師からの手紙ないし報告、上奏文や上論の英訳、中国発行の新聞記事などであり、イギリスに関するものは、イギリス各地で開催されたアヘン貿易反対集会の議事録、アヘン貿易に関する下院討議、タイムズやその他の新聞記事の紹介、『一九世紀 (The Nineteenth Century)』などの雑誌記事の紹介、政治家の発言への批判などである。「アヘン貿易反対協会」の情報収集能力は驚くべきものであり、『フレンド・オブ・チャイナ』には、当時のイギリスや中国におけるアヘン問題に関連する文献がほとんど網羅的に紹介されている。『フレンド・オブ・チャイナ』に掲載された記事を手がかりにその原文を探するという方法で、効率的に史料収集をおこなうことができた。また、『フレンド・オブ・チャイナ』を読むことによって、アヘン問題がイギリスや中国でどのように議論されてきたかという大きな流れを掴むことができる。中国側の史料はアヘン問題に言及すること少なく、政策の推移を掴むことが難しいが、『フレンド・オブ・チャイナ』は中国史料の弱点

を補うものである。

モリソン・パンフレットは、一九世紀末のイギリスで政治宣伝を目的として大量に出版されたパンフレット類、雑誌の抜き刷り、新聞記事などを主な内容としており、一頁だけのものから百頁近いものまである。すべて、G・E・モリソン (George Earnest Morrison) が自分の関心にもとづいて収集したものである。東洋文庫発行のカタログ (A classified Catalogue of Pamphlets in foreign languages in the Toyo Bunko, Tokyo, 1972) によれば、パンフレットは全部で七二〇項目あり、そのうち中国関係は五八七〇項目とのことである。アヘン関係パンフレットは二二二項目である。「アヘン貿易反対協会」はアヘン貿易反対キャンペーンのために多数のパンフレットを用意しており、それらのほとんどはモリソン・パンフレットに収録されている。アヘン関係モリソン・パンフレットはその一つ一つは断片的な内容であるが、『フレンド・オブ・チャイナ』とあわせて読むことによって、個々のパンフレットがどのような政治的文脈の中で出されたかが明確となった。私は、この二つの史料を活用して、一八六〇年代以降急速に拡大する中国でのアヘン生産をどのようにとらえるかについての論争を検討してきた。イギリスでは、中国をアヘン貿易の被害者ととらえ、中国自身がアヘンを生産して

いることを認めようとしなない「アヘン貿易反対協会」と、中国自身がアヘンを生産しているのだからイギリスがアヘンを輸出することは非難されるべきではないと主張するアヘン貿易擁護論者との間で、論争が繰り広げられた。イギリスでは、アヘン貿易の是非をめぐる論争と連関して、アヘンは毒物か嗜好品かをめぐる論争も展開した。「アヘン貿易反対協会」の主張は、イギリス人の正義感に訴えるものではあったが、現実を見ようとしなないものであった。一方、中国では、外国アヘンを駆逐するために中国におけるアヘン生産を奨励すべきか、それともアヘン生産とアヘン消費を厳しく禁止すべきかをめぐって、論争がなされた。

今後取り組んでいきたいと考えているテーマは二つある。一つは、「王立アヘン委員会 (The Royal Commission on Opium)」についてである。「王立アヘン委員会」は、アヘン貿易は停止すべきか否か、そもそもアヘンは毒か否か、という議論を实地調査で確かめるといふ目的のもとに一八九三年から一八九四年にかけて下院において結成された委員会である。第一段階として、ロンドンで中国関係者から証言を集め、第二段階としてインドに現地入りして各地で証言を得た。全部で七三三人の証人から二九〇〇項目に及ぶ回答を得、二五〇〇ページ、七冊に及ぶ報告書が一八九五年に刊行された。この報告書は議会文書として刊

行され、モリソン文庫に入っている。

「王立アヘン委員会」のインド調査には、「アヘン貿易反対協会」の書記であったアリグザンダー (J.G. Alexander) が同行し、彼は独自の判断で調査終了後に中国に立ち寄り、中国の大物政治家たちにアヘン貿易停止の具体策を提案した。アリグザンダーの行動については、「フレンド・オブ・チャイナ」およびモリソン・パンフレットに詳細な記録がある。しかし、アリグザンダーが見たインドや中国の現実には、アヘン追放への彼の熱情とは正反対のものであった。インドでの証言者のほとんどがアヘン消費は害ではない、アヘン生産は強制されていない、と発言し、中国の政治家はアヘン貿易停止の提案に極めて冷淡であった。アリグザンダーは上海で「申報」のインタビュウを受けるが、その記事もまたアリグザンダーを冷笑するものであった。インドアヘンの生産・輸出がいまだなお経済的に大きな意味を持ち続けるインドと、輸入アヘン課税収入と中国アヘン課税収入が財政的重要性を高めつつある中国は、アヘンの害を訴えるイギリス人の主張にほとんど耳を貸さなかった。「アヘン貿易反対協会」のアヘン追放への熱情と、インドや中国の冷めた対応とを対比して浮き上がらせてみたいと考えている。

もう一つのテーマは一九〇七年に中英間で締結された

「中英禁烟協定」についてである。「中英禁烟協定」とは、一九〇八年以後、イギリスはインドでのアヘン生産・輸出を、中国は国内での生産を、毎年一割ずつ減少させ、双方ともアヘンを一〇年で一掃するという協定である。「中英禁烟協定」には疑問が多い。イギリス駐中国公使ジョーダン (J. Jordan) によれば、当時の清朝中央が獲得する中国アヘンに関わる税収は毎年約四五〇〇万両であったという。この額には地方政府の税収は含まれていない。義和団賠償金の支払いに苦しむ清朝がこのように巨大な財源を手放す協定に調印したことを額面通りに受け止めるべきではないだろう。また、イギリスにとつても、中国アヘン課税収入は外債の担保として重要な意味を持っていた。中国のアヘン生産停止はイギリスの国益をも大きく損うのである。おそらく、イギリスはアメリカを中心としたアヘンへの規制を強化しようとする国際世論に直面して、インドアヘンの生産・輸出を停止したいと考えていたのであろう。インドアヘン貿易に利害を有する人々にアヘン貿易停止を納得させるためには、中国がアヘン追放にふみきつたと宣伝する必要があったと思われる。

「中英禁烟協定」の意味を探るには「フレンド・オブ・チャイナ」やモリソン・パンフレットは、あまり役に立たないようである。これらの記事は中国のアヘン追放への取

り組みを、手放して賞賛している。現実はどうであったのかに迫るためには、イギリス外務省文書や、「チャイナ・アソシエーション (China Association)」の報告などが有効であろう。「チャイナ・アソシエーション」の年次報告の一九〇九年から一九一五年までの分は、モリソン文庫に入っている。

モリソン文庫には、活用されていない宝物がまだまだ沢山眠っている。若い研究者の方々に、是非宝物を見つけて欲しいと思う。

第四七二回 一〇月二九日 (火)

### モリソン文庫の逸品選

東洋文庫理事長 斯波義信

本日お話し上げる内容は、当財団法人東洋文庫が、これまで収集して公開に供してまいりました図書・資料のなかで、文字通りその核心にあり、また礎石の位地を占めております二つの重要なコレクション、すなわち「岩崎文庫」と「モリソン文庫」のうち、今秋の「東洋学講座」のテーマになっております「モリソン文庫」に収まる代表的な図

書・資料・画像の一〇数点について、スライドを用いながらヴィジュアルにご説明し、概略のご理解をいただこうというものです。なお各スライドの選定につきましては、これまで、東洋文庫で催してまいりました数多くの蔵書の展示会において、出品の頻度が多かったものを中心に構成しました。全容をとらえていただくには明らかに足りませんので、サンプル的な例示として、あらかじめご了承ください。

【モリソン氏をめぐって】

はじめに、このコレクシヨンの旧蔵者、ジョージ・アーネスト・モリソン博士（医学）（一八六二—一九二〇）の人となり、おもな履歴、蔵書の東洋文庫への譲渡事情とその意義を、ごく簡略に述べます。オーストラリア生まれの博士の家は、父・伯父・叔父ともスコットランド出身で、同地およびオーストラリアにおいて、学者・教育者（学長など）として知られた家系でした。この血筋はモリソン氏ら五人の男兄弟に伝わり、しかも兄弟がそろってスポーツでも名を馳せています。モリソン氏は医学を志し、三三歳でエディンバラ大学から博士号を取得しますが、この青年期・壮年期の彼はむしろ単身での冒険的な大踏査を何度となく実践した大旅行家、これに伴う現地・奥地事情に精通

する人物として聞こえてゆきました。オーストラリア大陸の縦断・横断を皮切りに、ニューギニアへ向けての母国の植民事情を探検取材し、三三歳のときには上海から重慶をへて英領ビルマのラングーンへの水陸路を踏破し、その旅行記（一八九五年刊）で英語圏の世界にその名を知られました。

一八九五—六六年、彼はロンドン・タイムズ紙のバンコク駐在特派員となり、雲南・シヤム内地を踏査しつつ、在外公館の内部文書を含む一次資料をあつめ、英仏間の角逐の場であった仏領インドシナとその辺地情勢を報道しました。当時のタイムズ紙は、極東では日本の東京に駐在の特派員を置くのみでしたので、彼は一八九七年、請われて北京駐在の特派員に転じ、極東全域の重要な係争地点の現地情報を調べ電信で送る要職を帯びました。三五歳の時です。この職を辞した一九一二年まで、東北（満州）・朝鮮半島をめぐる日清露間の角逐、義和団事変、西太后の新政、日英同盟、日露戦争、辛亥革命とつづく極東の大動乱の渦中にいました。ロシアの南下政策を取材するために満州から黒竜江流域を踏査し、また旅順と大連にも拠点を置いて報道しました。朝鮮半島をめぐる日本の動勢についてはソウルから報道しました。義和団事変では北京の外国公館区域を救援する軍に身を投じました。日露戦争では日本側に従軍

し、旅順の開城を伝え、ポーツマス条約の内容も現地に飛んで報道しました。一九一〇年にはトルキスタンに旅して、中国の西辺發展を記事にしています。

中華民国が成ると、タイムズ紙を辞して大總統袁世凱の外国人特別政治顧問となり、袁・黎（元洪）二代の八年間にわたり、新生中国の外交官・政治顧問の役をつとめました。復興外債の招致でも脇役を果たしますが、第一次世界大戦のときには、中国に対して参戦ならびに國際外交場裏での威信の向上について進言し、ヴェルサイユ平和条約では中国代表団の顧問になりました。自分では「アジア文庫」と呼んでいた蔵書は、タイムズ紙の特派員・大總統顧問であった二〇年間に形成されました。

ここに三つの彼ならではの特色があります。第一は蔵書の中心部分が一九世紀末、二〇世紀初頭の極東の重大事件の各件につき、現地に密着した形で政治・外交・経済イッシュュを復元再構成するための、ファーストハンドの資料・文献・画像の収集で構成され、質・量ともに他に比類を見ないワーキング・ライブラリーだったということです。これと関連して第二に、北京駐在特派員・大總統顧問として、彼はその情報収集に欠かせない絶好の人脈および各機関からの側面支援を手に入れたことが挙げられます。一九世紀西欧の「シナ学 (Sinology)」は、文献学・人文主義に立つアカデ

ミックな知識体系で、現地を踏むことなく哲学・文学・言語などの研究に重きを置くものでしたが、一九〇〇年においてハノイにフランス極東学院が設立されたのを転機として、より實際的、社会的な関心を加味した知識へと脱皮しました。米国の北京公使であったロックヒル、ドイツの北京公使医長であったフォルク、同じくブレットシユナイダー、日本大使に任じたヴァン・グーリックなど、必ずしもシナ学の専門家ではなくて、しかも学術的に大きな貢献を残した人々が数多くいます。ロックヒル（義和団事変の議定書調印の米特命全權大使）と親しかつたモリソンは、外交官・政治家・財界人・学者らと幅広い交際をしていました。のちにその蔵書を岩崎久弥氏に売却し、東洋文庫に帰することになる発端に關与した、横浜正金銀行北京支店の取締役の小田切万寿之助氏との交友もその一つです。

第三に、彼は書籍・資料の収集に臨んで、学術的に見ても完全主義を貫きました。第一級の極東担当のジャーナリストとして、報道した諸問題ごとに体系的で徹底した同時代資料のファイルをつくり、これが「日露戦争文献（一〇四項目）」「義和団文献（九四項目）」を含め、「モリソン・パンフレット」（約七二〇〇項目）という資料ファイルの形で蔵書に入っていますが、それだけではなく、そうした情報群を欧米「シナ学」の學術の流れのなかにきちんと位



置づける努力を惜しみませんでした。

蔵書の年代上の筆頭におかれたものはマルコ・ポーロの『東方見聞録』の四六種の刊本ですが、これは西洋人の直接で本格的なアジア知識の源流が同書に遡るからです。蔵書には以下、大航海時代以来の中国およびその周辺世界への踏査記録、また動植物誌・鳥類・昆虫図鑑・自然史・風俗誌、および各種の地図・石版画・銅版画・水彩画・写真帳（地図以下約一〇〇〇部）、イエズス会士の書簡や報告の集録、一九二〇世紀各地の開港場・税関の記録、ブルーブック、領事報告、中国方言辞書（五〇〇部）などがあり、「チャイニーズ・レポジトリー」などのシリーズものをはじめ、一二〇種の欧文の定期刊行物に及んでいます。

第一次大戦ころの経済の混乱にともなうインフレと銀価の下落のために、もともとは高額であった彼の給与ですら、生活を支えるのに不十分となりました。オーストラリアへの帰国を考え、自ら誇りにし、二〇世紀初頭のシナ学の蔵書として超一級であると世界中で目されていたその蔵書を、一九一七年に手放すことにしたのは、たぶんこういう事情のせいでした。彼は譲渡の条件の一つとして、分割・分散売却を拒否しました。たぶん彼はそうした憂き目を見た米人学者のベシック（直隸総督李鴻章顧問）の轍を踏みたくなかったのでしょう。もう一つ、彼は蔵書を極東に留めて

おきたかったようです。中国のたどる道にひとしおの愛着と思ひ入れがあったとされています。

ともかく、一九一七年、二四、〇〇〇冊の蔵書はハーヴァード大、エール大、カリフォルニア大などの購入希望にもかかわらず、三菱合資会社社長の岩崎久弥男爵の手に帰し、整理に七年を費やしたのち、一九二四年に男爵による財団法人東洋文庫の設立の時に「岩崎文庫」とともに寄贈されました。このいきさつはここでは省き、「モリソン文庫」の日本への移転が、発足後間もない東洋学にとって、どういう意味をもっていたかについて一言触れます。東洋史学の成立は一九一〇年です。近代的な史学の樹立をめざして一八九九年に国史学が生まれた背景には、江戸時代以来の国学からの国史の自立がありました。同じようにアジアの学問も漢学から自立する必要がありました。西洋史からアジア史の学究に転じられた白鳥庫吉博士は、欧米留学を通じて、ヨーロッパ・シナ学の先進的な成果を摂取する必要性、そして中国の歴史・文化を周辺アジアのそれとの相互交渉という角度からとらえなおす必要性を痛感されたようです。モリソン文庫の日本への将来はこういう時期にあった、まさにタイムリーに起こったというべきでしょう。

## 【スライドの説明】

1. G・E・モリソン氏および岩崎久弥氏の肖像

2. マルコ・ポーロ『東方見聞録』諸版本のうち、一四八五年ラテン語訳初版、アントワープ刊本。

この本を含む同書の各種刊本の四六種は、西洋人による東洋との直接交渉の発端を飾るものであるだけに、モリソン氏が格別に意を用いて収集した書籍です。スライドに映る一四八五年刊本は、『東方見聞録』の古刊本の二大系統の一つ、フランスの地理学協会本の系列に入り、ポーロがヴェニスでのドミニカン派の神父ピノ師に贈った定本による刊本で、世界でも有数の書です。ちなみにスペインのセヴィラにあるコロンブス図書館にも同じ刊本がありまして、それにはコロンブスの書き入れがあります。『東方見聞録』のタイトルをもつ書の刊本を、世界を見渡しても稀とすべき四六種類も集めたということは、十分に学者に匹敵する収書家としてのモリソン氏の面目をよく示しています。

3. メンドーサ著『シナ大帝国史』一五八五年ローマ刊本。

ホアン・ゴンザレス・メンドーサ（一五四五—一六一八）はスペインのアウグステイヌス派の神父で、みづから中国を踏むことはありませんでしたが、この当時の宣教師報告・

旅行記・見聞録にもとづいて中国史を書き、西洋にはじめて体系的な中国事情を伝えた欧文書として、『東方見聞録』と並ぶとされています。氏は『シナ大帝国史』については、一七二五年刊にいたる伊・英・仏・蘭・スペイン各国の計一〇種類の刊本をその蔵書に入れていました。

4. ピント著『極東遊記』一六一四年リスボン刊本。

ポルトガル神父のメンデス・ピント（一五〇一—一八三三）は、インド、東南アジア、中国、日本を広く漫遊し、日本にも三回来航しました。一五四三年に種子島に至り、鉄砲を日本に伝えた人物と自称しています。モリソン氏は日本関係の著述、地図、画像も熱心に収集していますが、これもその一つで、リスボン刊のポルトガル語の初版本です。この書については、氏は一六一四、一六二〇、一六二八、一六三五、一六四五、一六五二、一六七八、一七二六の、八種類の刊本を収蔵しました。

5. オルテリウス著『アジア新図（世界の舞台）』一五七

〇年アムステルダム刊。

世界地図というと、古くからギリシャのプトレマイオス系列の、西洋だけを中心としたものが普通でしたが、大航海時代にマジエランの世界周航によって、地球球体説が実

証されて、世界図が一新され、投影画法が広まりました。メルカトル(一五六九)の図法は有名ですが、その翌年にオルテリウスがこの図を著し、地理学的にはむしろ典型的なアジア図として重視されています。ここでは紹介の意味をかねて、オルテリウスのアジア図をご覧にいます。

6. テイシエイラ著『日本島図』一五九五年初刊。

一六一八世紀における西洋人のアジアへの進出の動機のうち、宣教目的以外に、日明貿易への参入が利益の大きいものとされていきました。当然に日本への関心が強まり、日本地図が世界図のなかにはつきりと登場してきます。テイシエイラ・ダ・モータの『日本島図』は日本だけを一枚の地図としてあらわした最古のものでして、図やその内容はまだ稚拙さがありますが、それでもかなり実情に近く描写しています。

7. トロロップ著『英船ライオン号航海日誌』自筆本、一七九二・九・二七—一七九四・一〇・五。

英国王ジョージ三世が、清国の乾隆帝との貿易をめぐる交渉を託して派遣したジョージ・マカートニー伯は、東インド会社の戦艦ライオン号で天津との間の海路を往復しました。このとき船長のジョージ・トロロップが記した航海

日記です。同じく同行した秘書のジョージ・ストーントンが残した中国沿岸部や運河のスケッチ帖、次のスライドにできます画家アリグザンダーの水彩画集とともに、ほかに類のない貴重で具体的な記録です。

8. アリグザンダー筆『乾隆大皇帝』一七九三—一七九四。

まだ写真機、写真家が登場しなかった一八世紀当時、マカートニー使節団には、水彩画家のウイリアム・アリグザンダーが随行しました。かれは会見の様相を直接に描くことはできなかったようですが、それでも乾隆帝の肖像画を残しています。このほか中国に滞在した一七九三年七月から九四年一月の間、中国の各階層の人物のスケッチ画集四八枚を描きました。あえて上流の人物でなく、一般の人々の生活・風俗を伝えたこの画法は、当時オリエンタリズムと呼ばれて、西洋ではもてはやされたようです。

9. ダンカン『アヘン戦争図』一九四三年ロンドン刊、銅版。

わが国の高等学校の世界史の教科書で、口絵によく掲載されているおなじみの図です。モリソン氏収集のこの種の銅版による絵画や地図は約一〇〇〇点に上ります。この図は東インド会社から派遣された鉄甲外輪蒸気戦艦のネメシ

ス号(六六〇トン、全長六〇メートル、一二〇馬力、三二ポンド砲二門を搭載)が、一八四一年一月七日、広州湾口の川鼻砲台沖で清国の全長三〇メートル級のジャンク戦艦を撃破している情景です。

10. プラット『南京条約の調印図』一八四六、銅版。

一八四二年八月二十九日、長江の河口に停泊する英国軍艦のコーンウォリス号の船内で、英国側代表ヘンリー・ポティンジャー、清国側代表耆英の間で南京条約が締結されました。この図中に見えるおもな人物の姓氏も別に注記されていて、歴史的に重要な絵画です。

11. チネリー『水彩画集・香港港、マカオの風景、聖ドミング教会(マカオ)』一八三三—三八年、水彩。

ジョージ・チネリーは、英国の画家で、インドに長く滞在した後、香港、マカオ、広州に来て主として風景、人物画を描き残しました。アレグザンダーと同じくオリエンタリズムの画法に属します。大英図書館などにも若干は保存されていますが、モリソン文庫の収蔵品が内容、数量とも世界中で最も充実しています。

12. 雑誌『The Friend of China』第一号、一八七五年三

月。

13. 雑誌『The Forum』一八九九年九月号(デンビー筆「上海の綿紡糸業」を載せる)。

この二つのスライドは『モリソン・パンフレット』としてファイルされている、総計約七二〇〇項目に達する同時代の時事問題・重要事件の情報収録を例示するために掲げました。前者はアヘンの吸引や取引に関する資料や評論の抜き刷りやパンフレットなどの詳しいファイルの中にあり、きわめて興味深いデータです。後者も一八九九年の上海の綿紡糸業の詳細な記録です。ともに先週の講演で新村容子先生が引用されたパンフレット類の中にありますので、ここに画像でお見せしました。

14. ロックヒル著『中国および朝鮮における条約集(一九〇四—一九〇八)』一九〇八年、ワシントンD・C刊。

ウイリアム・ウッドヴィル・ロックヒル(一八五四—一九一四)は、米国の外交官で、後に國務次官となり、タフト大統領のとき、國務長官ヘイを補佐して門戸開放政策を立案したという有名な人物でして、またモリソン氏の親友でした。彼は中国語・チベット語に精通していて、北京公使館員、スミソニアン研究所員のとき二回にわたりチベットの調査旅行をし、日記風の報告書を公刊して著名になり

ました。趙汝适「諸蕃志」やルブルクの旅行記の訳註もあります。義和団事変後の議定書の締結のときは、特命全權大使として調印に列しました。一九〇五年から〇九年まで北京駐在公使となり、一九一四年には袁世凱大總統の政治顧問に招かれますが、途中ハワイで客死しました。このように、モリソン氏の閩歴や業績と重なり合うことが多く、ために親友だったのでここに掲げました。

15. ムム編「義和団議定書締結のためのドイツ使節団の写真日記」一九〇二年、ベルリン刊。

義和団事変はモリソン氏が北京駐在の特派員に任じて早々に生じた大事件でありまして、事変の記録と報道は彼が最も努力と情熱を傾けたものの一つです。この写真日記の編者のアルフォンス・フォン・ムム・フォン・シュヴァルツェンシュタインはドイツの特命全權大使に任命され、議定書調印のために北京に赴きました。その写真日記二六八頁は、イタリアの港を出て広州、上海をへて北京に至る旅程にはじまり、北京での長期の滞在中の城内外の観察、調印式の模様を、ドイツが誇る写真技術を駆使して精細に記録したものです。一九〇一年九月七日締結の議定書の署名文、小村寿太郎、ロックヒル、ムムなど一ヶ国代表、および清国代表の李鴻章・慶親王の写真が載っています。また紫禁

城内の宮殿、頤和園、城壁と城門、前門に開設された鉄道停車場と蒸気機関車、科挙の貢院、天壇など、在りし日の情景が精確に写っていて、興味は尽きません。

以上、モリソン氏のコレクション「モリソン文庫」のほんの概要のみ、スライドを用いてお話いたしました。今後皆様がこの貴重な資料をいっそう盛んに利用していただくことを願っております。(註：講演当日、スライドの説明の際に言及したものの一部は、この文章の冒頭におけるモリソン氏と「モリソン文庫」についての略説の箇所に入れてある)